

聖書：Ⅱサムエル 22：1～51

説教題：ダビデとその裔に

日時：2019年4月14日（夕拝）

この22章は1節に「主がダビデを、すべての敵の手、特にサウルの手から救い出された日に」歌ったとありますように、比較的初期に作られたものと思われます。また注目に値するのは詩篇18篇とほとんど同じであることです。そしてこの歌の中では外国との戦いのことも語られていますから、ダビデが王になった後の出来事も含まれていると思われます。おそらくサムエル記を閉じるにあたってダビデの生涯を総括するものとして、この神への賛美がここに載せられたのでしょう。この彼の歌を通して、私たちはダビデが歩んだ祝福の人生の秘訣について知ることができます。全体を三つに分けて見て行きたいと思います。

最初の区分は2～20節です。まずダビデは「主よ、わが巖、わが砦、わが救い主よ、身を避ける、わが岩なる神よ。」と歌い出します。さらに「わが盾、わが救いの角、わがやぐら、わが逃れ場、わが救い主、・・・」と、まるでマシンガンのように、主に対する賛美の言葉を次々に重ねています。この彼の賛美は、5～7節に記されている彼の非常な苦しみを見る時に理解できます。「死の波は私を取り巻き、滅びの激流は私をおびえさせた。よみの綱は私を取り囲み、死の罟は私に立ち向かった。私は苦しみの中で主を呼び求め、わが神に叫んだ。」と。ダビデの生涯は苦しみの連続でした。死と背中合わせの毎日でした。前の王サウルから槍を投げつけられたり、命をつけ狙われて国外へ逃げて行ったり、外国の地で外国の王に捕らえられたこともありました。また逃亡中にサウルと同じほら穴にいたこともありましたが、山の反対側までサウル軍が迫って来て、次の瞬間には命を落としてもおかしくない状況もありました。またサウルの死後も長期間に渡るサウル家との戦いがありましたし、外国との戦いもありました。そんな苦しみに次ぐ苦しみの毎日の中でダビデは主を呼び求め、主に叫んだ。その彼の祈りに主は聞いてくださったのです。

主がどのようにその祈りに応えてくださったかが8～20節で歌われています。「地は揺るぎ、動いた。天の基も震え、揺れた。主が怒られたからだ。煙は鼻から立ち上り、

その口から出る火は貪り食い、炭火は主から燃え上がった。」これは出エジプト記に記されているシナイ山での主の現れを思い起こさせる表現です。10 節以降も出エジプトの時に主がエジプトに送られた災いに言及するものです。そして 16 節は有名な葦の海・紅海が真っ二つに分かれて、その間をイスラエルの民が進んだ出来事を指しています。ダビデ自身の生涯にこれと全く同じことが起こったわけではありませんが、ダビデが言いたいことは、このような偉大な御腕をもってイスラエルを救われた神が私とともにいて、あらゆる苦しみから救い出してくださったということ。あのシナイ山で現れた神、出エジプトの神、紅海の奇跡を行なわれた神が、私とともにいてあらゆる苦しみから救い出してくださった。そして 20 節にある通り、私を広いところに連れ出し、助け出してくださった。私たちも困難のただ中で、私とともにいてくださるのはこのような力強い主であると仰ぎたいのです。

第二の区分は 21～30 節です。ここは一見読む私たちを当惑させる部分です。21 節でダビデは「主は、私の義にしたがって私に報い、手のきよさにしたがって顧みて下さいました」と言います。25 節にも「主は私の義にしたがって顧みて下さいました。御目の前の、私のきよさにしたがって。」とあります。このダビデが言う「私の義」とは一体何だろうかと思えます。人間が神の前に誇れる義などあるのだろうか。私たちは新約聖書のローマ人への手紙などから、人間は誰一人義を主張できず、私たちが持つことのできる義はただイエス・キリストを信じる信仰による義であると知っていますので、ここのダビデの言葉もそういう意味ではないかと読みたくなります。しかしそうでないことは今読んだ 21 節と 25 節の間の 22～24 節を見ると分かります。そこでは信仰による義ではなく、ダビデ自身が主の道を守り、悪を行わなかったことが述べられています。すなわちダビデ自身の義の生活のことです。果たしてそのようなものは神の前で義と主張できるのだろうか。さらにその義に従って神が報いてくださることなどあり得るのだろうか。私たちは思ってしまうわけです。しかしここの「義」は「完全である」とか「罪がない」という意味ではありません。例えば 24 節を新改訳は「私は主に対して全き者」と訳していますが、新共同訳はここを「わたしは主に対して無垢であろうとし」と訳しています。このことから想像がつきますように、ここの意味は「罪がない完全さ」ではなく、「誠実である」とか「忠実である」ということです。ダビデはここで自分は主に対して誠実であろうとして、主のみ教えに従う生活をして来たと言っています。彼は

もちろん完全な人間ではありませんでしたが、結局、主に背を向け、主から離れることをしませんでした。これは彼の生涯が向いていた方向性のことなのです。主に誠実に歩もうとして取り組んだ彼の全体的な姿勢のことを言っているのです。

参考になるエピソードとしてサムエル記第一 24 章や 26 章に記された、サウルに手を下すことができたのに、それをしなかった時のことがあげられるでしょう。ダビデはその気ならサウルの命を取ることができました。自分たちがほら穴の奥にいるとは知らずに、用を足すためにサウルが同じ洞穴に入って来た時、またダビデと若者がサウルの枕元まで来たのに彼が眠りこけていた時、ダビデの部下は、「今こそチャンスです！」「サウルを打ちましょう！」「これは主の御心です！」と進言しました。しかしダビデは主に油注がれた王に手を下して罪を犯すことをしませんでした。なぜでしょうか。それはダビデが主に信頼したからです。自分で手を下さず、主に委ねたからです。彼はその時、サウルに言いました。「主は一人一人に、その正しさと真実に応じて報いてくださいます。」 また言いました。「今日、私があなたのいのちを大切にしたように、主は私のいのちを大切に、すべての苦難から救い出してくださいます。」 これらの言葉と、今日の箇所でダビデが言っている言葉は同じです。主は私の義に従って、私のきよさに応じて報いてくださる、と。

そのようにして主がしてくださったことが 26 節以降にあります。「あなたは、恵み深い者には恵み深く、全き者には全き方。清い者には清く、曲がった者にはねじ曲げる方。苦しむ民を、あなたは救われますが、御目を高ぶる者に向け、これを低くされます。云々」と。ここから学ぶことは、困難の中でどのように生きるかは重要であるということです。私たちはともすると様々なプレッシャーや苦しみの中で、こういう状況だから神の戒めを守れなくても仕方がない、と自分に言い訳しがちです。そして義の道から逸れてしまいがちです。しかしダビデはその中でも神に対して悪を行わない生活に祝福があると述べています。私たちもこのことを改めてダビデの告白から学びたいと思います。苦しくなったら主に従えないとするのではなく、苦しい中でも主に従い、咎から自分を守る生活。そこにダビデが経験したような祝福の歩みが備えられているのです。

第 3 の区分は 31～51 節です。ここでは主が与えてくださる勝利と、主の王国の将来

について歌われています。まず注目すべきは 31～37 節までは主語がいずれも「主」または「神」になっていることです。神はどのようなお方であり、神は何をしてくださる方が歌われています。次いで 38 節以降では主語が「私」が中心になります。すなわちダビデが実際にしたこと、ダビデが勝ち得た勝利についてです。この「順番」は大事なことを語っています。すなわちダビデがなし得たことはすべて主なる神の恵みと力によるということです。ダビデの勝利は一重に主の恵みに基づくものであるということです。そして 44～50 節では、主の王国が持つ全世界的な広がり、全世界的な影響のことが述べられています。ダビデが経験したことは単にイスラエル一国だけの事柄ではありません。外国の国々もダビデのもとに来て仕えるようになる。これは主の恵みが広く全世界の人々にまでも及ぶというニュアンスを持つものです。やがて現れる王が、このような全世界的な祝福をもたらすことについては、たとえばゼカリヤ書 9 章 9～10 節にこう語られています。「娘シオンよ、大いに喜び。娘エルサレムよ、喜び叫べ。見よ、あなたの王があなたのところに来る。義なる者で、勝利を得、柔和な者で、ろばに乗って。雌ろばの子である、ろばに乗って。わたしは戦車をエフライムから、軍馬をエルサレムから絶えさせる。戦いの弓も絶たれる。彼は諸国の民に平和を告げ、その支配は海から海へ、大河から地の果てに至る。」 このように導く主を思って、ダビデは 50 節でこう賛美します。「それゆえ、主よ、私は国々の間であなたをほめたたえます。あなたの御名をほめ歌います。」

最後の 51 節はこの歌の結論部です。「主は、ご自分の王に救いを増し加え、主に油注がれた者ダビデとその裔に、とこしえに恵みを施されます。」 これはサムエル記第二章に記されたダビデ契約を基にした言葉です。主はダビデにこう約束されました。「わたしは、あなたの身から出る世継ぎの子をあなたの後に起こし、彼の王国を確立させる。」「わたしは彼の王国の王座をとこしえまでも堅く立てる。」「あなたの家とあなたの王国は、あなたの前にとこしえまでも確かなものとなり、あなたの王座はとこしえまでも堅く立つ。」 主はやがてダビデから一人の王を起こし、そのまことの王によって、ダビデの王国をとこしえに堅く立てると言われました。そのやがて現れるまことの王のことが、ここでは「ダビデの裔」と表現されています。ダビデはこの 51 節で自らがこのように苦しみから救われ、国々の上に高く上げられているのは、ただ神の約束によることだと言っています。主が契約を真実に守ってくださり、自分と自分の国をこのよう

に祝福していただきます。そしてこれは自分の代では終わらない。神はやがて自分から出る一人の王、ダビデの裔なるまことの王を通して、その王国を豊かに祝福して下さる。その将来の祝福を確信して、ダビデはこの賛美をささげているのです。

そして今日の私たちが知っていることは、神はこの約束を守ってくださって、ついにダビデの裔なる約束の王イエス・キリストを遣わして下さったということです。そしてこの方によるとこしえの祝福に私たちを生かしていただきます。そして特に今週思うことは、このまことの王なる方が私たちの身代わりに十字架にかかってく下さったことです。今週金曜日 19 日は主の十字架を覚える受難日です。まことの王なる方がどうして十字架刑などに処されなければならなかったのでしょうか。それは実にそこにしか私たち罪人の救いはなかったからでした。神はご自身の愛する一人子を世に遣わし、その方の身代わりの十字架の死を通して、その方を信じる私たち人間の罪を赦し、祝福するという世界を備えてくださいました。このまことの王の到来と、その十字架の死によって、ダビデに約束された神の契約は豊かに実現されることになったのです。

私たちは今夕、神がダビデへの約束に従って、まことの王イエス・キリストを遣わして下さったこと、そしてキリストは神の祝福を私たちにもたらすために、十字架に進んで下さったことを改めて覚えて御名を賛美したいと思います。ダビデが結論的に述べた 51 節をもう一度お読みします。「主は、ご自分の王に救いを増し加え、主に油注がれた者ダビデとその裔に、とこしえに恵みを施されます。」 この約束に基づいて神がついにお送りくださったイエス・キリストのもとに額づいて、その十字架の死を通して神が与えてくださる祝福にあずかりたいと思います。そして三日後の復活を経て、今や全世界の上に御国を広げておられるキリストを仰いで、どんな困難の中でも主に祈り、また義の生活をささげ、このまことの王を通して神が与えてくださるとこしえの御国の祝福に生かされる民の歩みへ導かれたいと思います。